甲田の裾

KŌDA NO SUSO

2015
3号
通巻686号

松丘保養園の機関誌

鷺草との出会い～宮本良子さんとの思い出～

私と鷺草（サギソウ）との出会いは、十年近く前になります。

ある夏、旧4センター明月寮、西玄関に白く鳥に似た小さな花が咲いている鉢植えを見つけました。私も花が好きで育てていますが、初めて見る花、名前も知らない花に、引き込まれる様な不思議な感じと感銘を受けた事を今でも鮮明に覚えています。誰が育てているのか、何と言う名前の花なのか、すごく興味を抱きました。その頃の私は介護員になって日も浅く入所者さんの名前をようやく覚え始めた頃で、仕事以外で私の方から話しをすることは苦手でした。

しかし、数日後水やりをしている一人の女性を見かけ、もしかしたら花を育てている人かもと思い、一目散に駆け寄って行きました。

「何か用事？」と振り向いた女性が宮本良子さんでした。宮本さんの庭には、花以外にも盆栽なども育てていたのですが、鳥に似たその花がすごく気になり、名前を尋ねると、「これは鷺草（サギソウ）だよ、花が飛んでいる鷺に見えるから。」と教えてくれました。

鷺草は球根で春に芽がでたら、

水はけの良い土に一つずつ植え、肥料を入れ育てると夏に花を咲かせます。花が終わったら茎を切って葉っぱだけ残し枯れるまで水をあげ、そのまま冬を越して、春に土から球根を取り出し、芽が出たら同じように植えます。

「手間は掛かるけど、上手に育てれば毎年咲くのよ。」と笑顔で話してくれました。

「私の自慢だけど、元自治会会長の伊藤文男さんに、唯一褒められたのがこの花なの。花の高さが揃っていて上手に育てていると言われたの。」と楽しそうに教えてくれました。

宮本さんから球根を5個もらい、一鉢から始め、今では十鉢まで増えました。毎年、「花が咲いたよ。」と話すと「よかったね、大事に育ててね。」と笑顔で答えてくれた事が思い出されます。

亡くなった宮本さんと私をつないでいる白い可憐な鷺草です。

「宮本良子さん今年も綺麗に鷺草咲きましたよ。」

（中央センター2階　介護長　田畑　孝幸）

鷺草の花言葉は：
「繊細」・「清純」・「夢でもあなたを思う」

甲田の裾 平成27年3号 通巻686号 目次

表紙裏 「鷺草との出会い」…… 田畑 孝幸

納涼祭りもノーマライゼーション …… 副園長 江谷 勉 … 2

随想 一木一草(いちもくいっそう)あれやこれや(6) ―イケメン藤川光男狂想曲―
…… 滝田 十和男 … 6

日本国内療養所医療従事者
フィリピン ハンセン病研修に参加して (前編)
…… 看護師 横内 里美 … 16

短歌 白樺短歌会 …… 22

保養園での11年7ヶ月…… 三浦 喜美子 … 24

野の花の微笑み(13) …… 比良 信治 … 31

松丘保養園慰安会賛助会員募集・人事異動 …… 36

自治会日誌・編集後記 …… 37

表紙写真:「鷺草(サギソウ)」 写真撮影:叶 順次
写真提供:福祉室

「甲田の裾」バックナンバー(平成24年1号〜)は
下記ホームページより閲覧いただけます。

松丘保養園のインターネットホームページ
http://www.hosp.go.jp/~matuoka/

納涼祭りもノーマライゼーション

副園長　江谷　勉

今年の納涼祭り

七月三十日に第33回松丘保養園納涼祭りが開催されました。私にとっては松丘で二度目の納涼祭りでした。保養園ではお祭りは自治会役員を含めた保健科運営委員会で計画されます。私は委員長をさせていただいているのですが、昨年は赴任早々で勝手が分からず、たいした工夫もできないままお祭り当日を迎えてしまいました。慰問に来て頂いた地区ねぶた愛好会や婦人会の皆さんにもほとんど声を掛けられずに終わってしまいました。

初めてのお祭りで感じたのは入所者の参加が少なく、職員の雰囲気も堅くて盛り上がりに欠けることでした。一般の方の姿も少なく、プライベートでお祭りに参加する職員はほとんどいませんでした。

理由は簡単で、職員にとってお祭りは半ば仕事で、自分たちも一緒にお祭りを楽しむという雰囲気ではなかったのです。お祭り自体も一緒に楽しめる形にはなっていませんでした。それでも中止になっていた花火大会、といっても小さな仕掛け花火ですが、を再開したところ入所者には喜んでいただけました。入所者が少なくなって昔のような賑わいがないのは仕方ないことですが同じ方法ではじり貧になるばかりで、これでは寂しい限りです。それをなんとかしたいと感じたのが昨夏でした。そう考えながら来年は例年より早く五月の委員会で夏祭りの計画を議題にしましょうと約束しました。

そして、今年の五月に委員長として強調したのは「楽しいこと、ハッピーなことをするのだから、楽しい雰囲気で相談しましょう」「職員も一緒に楽しめるお祭りにしましょう」ということです。なんとな

く委員会での職員の表情も堅く、遠慮しているように感じたからでした。

私は長島愛生園と邑久光明園の夏祭りを経験してきました。両園とも十七時を過ぎると仕事の終わった職員がビール片手に入所者と一緒に祭りを楽しみます。家族を連れてくる方もたくさんいます。ＯＢや近隣の方もたくさん遊びに来ます。私も毎年、娘や友達を連れて遊びに行きました。そんなことを説明しながら、愛生園や光明園のお祭りのいいところを保養園にも取り入れたいと考えていました。当たり前のことですが入所者にお祭りを楽しんでもらうためには、まずは職員がお祭りを楽しまないと・・・。

今年から保育所が夏祭りに参加することが決まりました。これは初めての試みですが、園児との交流促進は療養所内の保育所の存在意義を高めることにもつながりますし、お祭りの雰囲気を変える意味でも大きなチャンスです。さらに看護課からは「今年は出店を出したい」という意見が出ました。お祭りを盛り上げたいのはみな同じだったのです。変わりそうな雰囲気を感じてとても嬉しかったです。

そこからは介護員さん中心に納涼夏祭り出店担当者会議ができ、計画は進んでいきました。もともと楽しい企画ができる人材には事欠きません。ただ、力を発揮する場がなかっただけですから、私の役目は「やってみようよ！」と声を掛けるだけでよかったのです。

お祭り会場では誰でも生ビールが飲め、食事ができるようになりました。職員による初めての出店はかき氷、綿あめ、フランクフルト、たこ焼き、焼きそば、焼肉、ヨーヨー釣り、輪投げ、千本くじです。これまで参加がなかった給食やリハビリも出店を手伝ってくれ

ました。医局、薬剤科、検査科、事務も顔を見せてくれました。なかには手弁当でトウモロコシやゼリー、果物を提供してくれた職員もいました。ありがたいことです。お祭り会場は自由席を大幅に増やし、出店ができたことで、よりお祭りらしい雰囲気になりました。保育所や慰問に来てくれた子供会にはかき氷や綿あめをプレゼントして、ゲームで遊んでもらいました。

また、自治会に急に無理なお願いをして地区ねぶた愛好会や婦人会に生ビールをご馳走してもらいました。

当日まで入所者はたくさん来てくれるだろうか、職員は残ってくれるだろうかと心配しましたが、ふたを開けてみると例年の倍以上の入所者が、しかもお祭りの終わる二十時過ぎまで楽しんでくれました。勤務が終わった後、子供を連れてきてくれた職員もいて、保育所のご父兄、地域の方にもたくさん参加していただけました。来賓の県や市にも好評だったようです。

そして、なにより嬉しかったのは大勢の子供達を見て入所者が見せてくれた笑顔でした。やはり皆さん子供が大好きなんですね。お祭りで子供がはしゃぐ姿が一番のご馳走だったのかもしれません。

今回は入所者と職員の子供が交流しました。これはとても大きな意味のあることだと思います。入所者には子供を自分の孫、ひ孫のように感じていただけたのではないでしょうか。職員も感じるものがあったはずです。ある職員の子供が入所者の膝に抱かれている姿は印象的でした。

夏祭りもノーマライゼーション？

例年どおり保養園は八月六日に県からねぶた観覧に招待していただきました。その際に三村知事がこう話されました。

「ねぶた祭りを一緒に楽しみましょう。一緒に楽しんでいただくのがノーマライゼーション！」

ありがたい言葉です。それならば、保養園で行うお祭りも普通のお祭りでいいはずです。これまでの納涼祭りは園が入所者と来賓をおもてなしする行事のようになっていたのかもしれません。私が昨年感じた「堅さ」はそこから生まれていたようです。そうではなく、お祭り本来の「参加者全員が楽しむもの」、「職員も地域の方も一緒になって楽しむもの」にできるようにすること。それが保養園の納涼祭りのノーマライゼーションです。もちろん、ただ騒がしいのではなくご高齢になられた入所者に受け入れていただける穏やかな形で。

ねぶた祭を始め、青森県には素晴らしいお祭りがあります。同時に津軽地方は宵宮のとても盛んなところです。こちらには一〇〇を超す宵宮があるそうです。正しくは「よいみや」でなく「よみや」と呼びます。岡山で過ごしてきた私にとって、この「よみや」は北国の短い夏を感じさせるとても風情のあるものです。園が取り組んでいる「緑の森プロジェクト」が進み、納涼祭りが地域の「よみや」のようになって、保養園が地域に愛される憩いの場になれば素敵ですね。

随想

一木一草（いちもくいっそう）あれやこれや（6）

―イケメン藤川光男狂想曲―

滝田　十和男

前稿でのサブタイトル「弥助親方狂想曲」は、読んで下さった方々から思いがけないほどの反響が寄せられ、なかには二度も三度も読み返したなどと、好意をこめて書かれていると、いささか書く事にもその責任の重さのようなものを感じている処だが、当時の国の法律によって、いったん発病を認められた患者たちは、強制的に狭い療養所の中に押し込められ、非人間的な集団生活を強いられていると、つい想像も出来ない珍事や出来事が起こるのも、止むを得ない事ではあるかも知れないが、それらの多くが世に出ないまま、歴史の中に埋没し消滅してしまうのも時代と自然の流れというものであろう。

けれども、多少は他人より療養所のメシを長く食い続けてきた老骨の記憶の袋の中に溜め込んで蔵ってあるものを、一寸ばかりヒモを緩めて白日の陽の目に晒してみるのも、悪くはあるまいと思うようになった。

「あんたは園内でいちばん古いんだから、昔の事を書いて置くべきだ」などと、おだてられると、つい その気になってしまう傾向があるのも否めない。

しかし何たって馬齢九十歳ともなると、どうしても毎日の生活のリズムが平板なものに流れていってしまう。その葛藤の中で原稿の締め切り日を告げられてから泥縄の感が免れないが、あわてて古い型のワープロの蓋を開けて打ち始めるのが、いつもの筆者の悪い癖となっている。

でも一人でも多くの方が読んで下さることを励みとして、又続稿の機会を与えられた事にも感謝して、今回は少しばかりショッキングな内容になるかも知れないが、筆を進めることとしよう。

昭和十一年秋十月末に院内の施設が丸焼けの火災

で、住む所を失った五百余名の患者たちは、一時、職員の官舎を空けてもらい、そこで急場を凌いでいたが、類焼した元の建物の土台そのままに利用した同じ場所に、火災直後から突貫工事で、驚くことに工期がなんと一ヶ月という猛スピードで建てられた木造バラックの建物は決して粗末な物ではなかった。なんでも市内の「阿部組」と聞いたように記憶しているが、その建築業者が県内の職人たちを総動員しての冬の寒気から、患者たちを一日も早く守ってやりたいと、驚異的な速さで完成させたという話は、美談的に何度も聞かされたものだが、それでも各部屋共に手狭であったため、本建築の建物が要望されていた。それには当時公立の施設であったので、火災保険に加入していたので保険会社から四十五万円という保証金が出る事になった。しかし保険会社は従来のような延焼の危険のある繋ぎ廊下式建物では、再保険の加入は認めない、という厳しい態度を見せたので、農園室の野菜畑だった所にも区域を広げて療舎を分散して新築の方針が伝えられた。そのときの話に、院首脳は他の療養所の住居状況を参考にするため、当時の富田主事（今の事務長）や再建のために県庁から派遣されて来た池田技師などを視察に出した。その結果、一室十二畳半五人部屋を造ろうとした。ところが、当時の患者代表である二田総務が猛烈に反対した。「三十畳で十二人部屋でなければ統制がとれない」と横槍を入れて、一棟三十畳の部屋四室に分散した建物になったという。

そんな事で、当局の不本意な一棟三十畳式の部屋が四室体制で、昭和十二年から十四年にかけて新棟が分散して続々と誕生するのである。

昭和十三年には火災の前にも無かった少年舎と少女舎が建ち、松丘小学校も近くに建てられた。これは他の療養所を視察してきた成果の一つだった。

私が「一木一草あれやこれや」の（1）で触れた若竹寮の桜について書いたが、その位置に今の私が住む「寿寮」があり、少年時代に思いを馳せながらの執筆となったとき、思い出すのは同じ年頃の子供たちばかりでの共同生活の楽しい事ばかりのような気がする。

新築の不自由舎「梅花寮」二号室での大人ばかりの部屋から、そこに残った父親とも別れて、同じ部屋に少し前に入院したばかりの菊池君と私の二人一緒に少年舎「若竹寮」に引っ越したのは昭和十三年の四月一日であった。

同じ年代の子供たちでも、大人ばかりの部屋で暮らして来たせいか、皆物知りが多く、院内事情に詳しくて、誰も彼もが私の先輩のようだった。

松華寮（左）・梅花寮（昭和24年頃）

当時は子供たちが一緒になれた嬉しさで、夜遅くまでふざけ合って、枕の投げ合いなどして騒ぐものだから、よく舎長から叱られたものだった。

舎長の熊谷久一さんは、妻のキヨさんと三号室一部屋を舎長室としていたが、大火の前は松丘での少年教育の草分けのような存在だったから、初めて開設された少年舎の舎長には打って付けの人だった。奥さんのキヨさんは片足が義足で手指も麻痺していて、かなり不自由度の高い状態だったが、よく子供たちのあれこれに気を配っていてくれていた。

だが当時誰もが病気が進むと腕や足が神経痛に侵される人が多く、熊谷舎長もその神経痛が激しく夜も眠れないほど苦しんでいたようだった。

若竹寮が開設されてから、その十日後の四月十日には松丘小学校の開校式があり、校長を兼ねる中條院長が校舎の玄関脇にモミの木を記念植樹の鍬を振るった姿が昨日の事のように思い出される。

それから三ヶ月ほどしてからだったと思うが、今回の狂想曲の主人公藤川光男（仮名）が、姉シゲ子と共に入院して来たのは。入院と言っても、もともと三年も前に北海道の夕張から、父親とその子供たち四人が送られて来たのだが、父親と長女のアイコは患者として即入院し、下の三人（次女のシゲ子、長男の一男、次男の光男）はまだ発病していなかったので、院附属の未感染児童保育所に預けられていたのだった。それが遂にライの初期症状である斑紋が、ごく小さなものであるが脚部の膝頭に出ている

のが見つかり、シゲ子は少女舎の若草寮に、光男は若竹寮の二号室の私の部屋に移されて来たのだった。そのときに見た彼等の父親の病状は、手や足の麻痺がかなり進んではいたが、どことなく品のある顔立ちをしていて、光男もまだ小学四年生ながら父親によく似たのか、この辺ではあまり見掛けない垢抜けした、どこかの華族の御曹子さまを思わせ、立ち居振る舞いも上品で、他の田舎育ちの泥臭い悪童どもとは、際立って違っていたから、私より四歳も年下ということもあり、何くれとなく面倒を見てやりたくなるような子だった。

その年も冬の季節も近くなり、毎日木枯らしが吹き荒れる日が続くと、神経痛病みには最も辛いらしく、舎長の熊谷さんはその激痛に苦しみ、昼間でも寝たり起きたりの日が多くなった。そのため舎長の仕事を補佐する係員として、軍隊帰りの滝沢助蔵さんが昼間だけ日勤で来るようになった。

私たち子供たちは、雪が降り出すと一人一人に子供用のスキーを当てがわれて、学校授業が終わると近くの畑の斜面をスロープにして毎日スキー遊びに熱中するようになった。

藤川光男とは気が合うというのか、いつも行動を共にしていたから、雪に濡れた衣服を炉端で乾かしてやるのも私の役目みたいになっていた。

ある時、別の寮（梅花寮）に住んでいた私の父親が、私が学校の授業で留守のとき、息子が何時もお世話になっているからと言って、懐にお茶の袋など忍ばせて舎長夫妻の所に挨拶に顔を出すようになった。

その際、キヨさんから、「子供たちへ、いろんな副菜を作って食べさせたのよ」という話を聞かされたことに驚き、後で「それは知らなかった。そんなに御馳走になっていながらお前は何も言ってくれないから・・・恥を掻いたわ」と怒って、私の坊主頭をゴツンと一発食らわしたのだった。

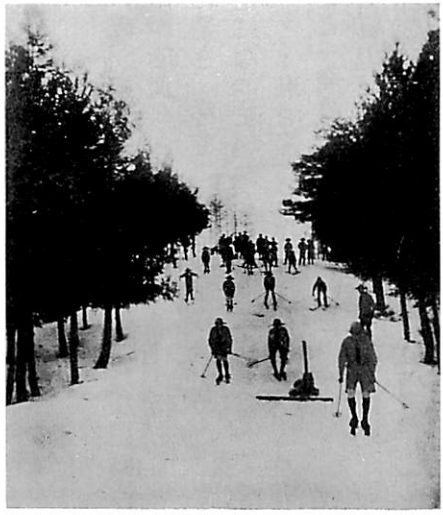
昔気質の父親にしてみれば、何よりそうしたことに筋目を立てたかったのだろう。だが、そんな事で私が痛い目に遭うなんて・・・と、私の胸に納得のゆかないものが残ってしまった。そんなに仰々しく話題にのぼるほど御馳走になった覚えもないのに、何で私が頭を叩かれなければならないのだろう、と。

ところが、舎長の補佐係員の滝沢さんが、子供たちと炉端を囲みながら、「お前たちが学校に行ってい

る隙に、キヨさんの母親のソト婆さんが来てナ、毎日のように倉庫の中から物を持ち出してゆくんだわ」と教えてくれた。なんとなく子供たちを煽動するかのような話しぶりに、それで合点するものがあった。というのは、その頃少年舎には子供達にと特別に炊事班から味噌や醤油や野菜の漬物などが支給されて、それが西側の倉庫の中に大きな樽に並べられていたのだ。物資の乏しかったその頃はとても個人では手の届かない物ばかりだった。それがいとも易々と持ち出されていると言うのだ。現に私達が学校から戻って来たとき、ソト婆さんが持ち出て行くのとバッタリと出くわすことも間々あった。

それを許していたら食べもしない物を食べたように吹聴されて、また父親に頭をゴツンとやられかねない。私達は夜寝床に就いてからゴソゴソと話し合うようになった。

二月の末頃の好天の日だった。根雪も一冬かけて固く締まり、スキー遠足には持って来いの雲一つない青空の下を朝から皆で初めて院外の三キロほど離れた「地蔵様」(これは五キロほど離れた岩渡村の人が冬の吹雪に巻き込まれて遭難するので街との中間地点に『避難小屋』として建てたという場所だが)までの初行軍に参加して、昼近くに少年舎に戻ってきたら、食堂に大きな二つの鍋に「おしるこ」が湯気を立てて待っていてくれた。キヨさんの友達二人も応援に頼んでの御馳走作りで、用意してくれたものだった。


スキーは松丘児童の冬の楽しみ(昭和10年頃)

ところが、さも美味しそうな匂いを嗅いだとき腹の虫がググッと鳴っているのに、痩せ我慢をして「俺ぁこんな物食わねぇだ」と言って立ち上がった。これを食べてしまえば又何と吹聴されるか分からないからだ。ところが、藤川光男も沢田徳一も立ちあ

がって、そこから一緒に三人で小学校のトタン屋根のてっぺんに登ってしまった。屋根の上のバイオリン弾きならぬ、今で言うハンストに出たのだった。

トタン屋根の上での眺めは、港の青函連絡船の出入りの様子なども眺められて、すこぶる壮快な気分も味わえた。父親の元に居て少年舎の人ではない山川浩も応援に駆け付け屋根の上に登って来て、総勢四人となった。しかし太陽が西に傾き始めると、寒さに震えてきて、辺りの寮舎の灯も点り始めて心細くなってきた。それで、そーっと少年舎の裏窓を開けて部屋に舞い戻ったら、ハンストの訳を知らない熊谷舎長さんがカンカンになって、座敷箒を逆さに持って待ち構えていた。

何の事はない、私が首謀者として目を付けられ、思いっきり箒の柄の竹の部分で連打された。私は余りの痛さに耐えきれなくなって、「舎長さんご免なさい」を繰り返して泣き喚いていると、菊池盈君がその中に入って来て、「舎長さん止めてー」と助け船を買って出て止めてくれた。

その時はそれで沙汰止みになっていたが、その年の六月にも同じような事件を引き起こしてしまった。その事で私と菊池君は小学校を二十日の停学処分になった上、大人の部屋にそれぞれに分かれて追放処分となってしまった。

何のことは無い少年時代の反抗期の一コマである。その事件を契機に熊谷さん夫婦は、舎長の職を辞し宮城県の東北新生園へと転園して行った。理由は熊谷さんの個人的な事情があっての事であったが、それらの理由については別に稿を改めて記述する日もあろうが、新生園では昭和十八年三月に私も追従したように入園して、熊谷夫婦とは親子のように親しくした二年間があった。

その後私と藤川光男とは一緒に住む事はなく、私が逃走してから松丘に四年振りに帰って来たときには、彼は無事回復して退院した後だった。一足先に退院していた彼の姉シゲ子を頼って、神戸に行ったということだった。

私が縁あって妻の知子と結婚したのは昭和二十二年で、それまでは結婚しても三十畳の部屋に独身者と混ぜ混ぜに暮らしていたのを昭和二十六年の春に松丘で初めての夫婦寮が完成し、入居者はクジ引きだったが、運良く白樺寮の四畳半の四号室に移ったばかりのときだった。

光男が兄の一男と一緒に私の新居を訪ねて来た。十年ぶりの再会だった。(兄の一男は成人して町の自転車屋などで働いていたが、やはり発病して松丘に入院していた)すでに二十二歳になっていた光男は背丈もずば抜けて高くなっていて、アメリカ軍の兵士のような服を着ていて、見るからに貴公子然として一層磨きがかかった姿は、何とも市井ではあまり見かけない垢抜けのした好男子になっていて、アイドルを凌ぐような甘いマスクぶりであった。何でも今まで神戸でアメリカ軍の軍用トラックの運転手をしていたが、突発した朝鮮動乱で勤めていた米軍が韓国に移動して行き、そのため光男は解雇されて米軍発行の運転免許証は持っていても、日本の道路では通用せず、それで青森近辺で働き口を探そうと松丘に帰って来たというのだ。

「どんな仕事でも良かったら、きっと良い仕事が見つかるよ」と私は励ましてやったが、その後近隣の働き口を探し回ったがなかなか良い勤め口は見つからなかった。毎日兄の一男の細君に弁当を作って貰い、それを抱えて青森市内に出掛けて行くのだが、いつも夕方にはしょんぼりとして足どりも重く帰って来るのだった。やはり松丘で育ったという身元を明らかに出来ないことや、免許証を持っていない等がネックになっていたようで、現実の厳しさは彼、光男を苦しめているようだった。

そんな状況に置かれている光男を知ってか知らずか、毎日市内に出掛けてゆく道沿いに一戸建ての「見習い看護婦の寄宿舎」があった。のちの「准看護婦学校」の前身で、まだ小学校の高等科を卒業したばかりの若い娘たちが七、八人住んでいた。その娘たちが光男の姿を見かけると、ワーワーと囃したて、中には親しく言葉を交わす者も出てきた。娘たちにしてみれば、田舎では滅多に見られない貴公子然とした若い男が目の前に現れて言葉を交わすなんて、よくよく珍しかったのだろう。こっそりとラブレターを書いて手渡す者があらわれた。しかも一人だけではない。三人からもだ。

光男にしてみれば目下失業の身に、降って湧いたような娘たちのラブレター攻勢にはだいぶ戸惑っているらしいという噂は聞いていた。

いつか私の部屋に疲れ切った顔をして現れて、抱えて来た鞄からハンケチを取り出して汗を拭こうとしたとき、鞄の中にそれらしい封筒が沢山垣間見えたものだから、私が「何それ、噂のラブレターかい？

俺にもちょっと見せてみな」とからかい半分に言ったら、彼は「これは人に見せるような物じゃないよ」と言いながらも、ドサッと私の前に雑に置いた。

他人の物でもラブレターともなると興味津々で、二、三の封筒から抜き出して読んでみると、津軽半島の突端今別村から来ているA子と地元の新城村のB子、そして西海岸の深浦から来ているC子ら三人のバトル振りが窺えるけれど、中身は一種のファンレターのような他愛の無いものだったが、相手の光男には笑い話では済まされない切羽詰まった状況を作り出す原因ともなっていた。

それで光男本人は就職を諦めて、改めて松丘に入園願いを出すのであるが、見習い生たちのラブレター騒動が事務方にも知れ渡っていてか、入園なんて飛んでもない、とばかりに取り合ってくれない。就職も出来ない。八方塞がりに陥り思い詰めた光男は飛んでもない行動に出てしまった。

午後の外科治療室に赴き、そこで二、三の看護婦が一つのテーブルを囲んで、明日の包帯交換のために使う包帯など、衛生材料の再生作業をしていた間をすり抜けて、その奥にある手術室のドアを開けて入って行った。不思議に思った一人の看護婦が後を追っかけて覗いてみると、何と光男は手術器具の棚から大きめのメスを取り出して、手術台に上がり自分の腹に突き刺そうとしていた。驚いた看護婦が大声を上げて仲間を呼び集め、夢中で光男の握っていたメスを取り上げることが出来た。

看護婦たちから「何て馬鹿な事をするの！」と叱られたが、「死なせてくれー！頼む。俺はもう駄目なんだ」と泣きながら暴れてみたが、何人もの看護婦に取り押さえられては、大の男の光男でも手も足も出ず、そうこうしているうちに男子の職員も加わり、無理矢理手術室から連れ出された。

これでは、狂想曲どころか、「若さまご狂乱の図」である。

そして、その翌日には事務分館から厳重に油を絞られて園外追放の処分を受け、私の所に顔を出す暇（いとま）もなく姿を消してしまった。勿論あのラブレターの入った鞄は抱えて行ったに違いない。

ところが、光男が出て行った翌日だ。光男の兄の一男が緊張した面持ちで事務分館（今の福祉室）の窓口に現れ、「いま木炭庫に火を付けて来た」「弟の光男を追い出したからだ」と落ち着いた物言いだったという。

木炭庫の二階は私が入院したときの草鞋を脱いだ部屋だ。私たちが去ったあとは木工場になっていて、排出したカンナ屑は二階の裏窓から下へそのまま捨てていたので、木炭庫の裏はカンナ屑が山のように積み上げられていたのだ。そのカンナ屑に「火を付けて来た」と平然としていたという。

緊急の園内放送は、松丘火防団の非常呼集が掛かるやら騒然となった。私もこれは一大事と馳せ参じたが、火の手はあまり見えず、白い煙だけがもうもうと立ち昇っていた。火はすぐに消し止められ大事には至らなかった。

一男は放火の現行犯として園内の「監禁室」に留置された。私は「いい大人がなんて馬鹿な事をしたもんだナ」と思いながら監禁室の厳めしい格子戸を開けて廊下から、「どうしたんだ」とだけ言葉を掛けると、私と同年の彼は案外素直に「迷惑を掛けてしまって・・・もう松丘にゃ居る訳にはゆかんなー」と三畳敷きの狭い部屋にうずくまり、考え込んでいる姿は、やはり後悔の念を見せていた。

監禁室に閉じ込められていた一男は、警察の手に引き渡されることもなくて、当時の国立の友園では放火犯人など何処も受け容れてくれる所はなく、静岡県の私立の療養所「神山復生病院」へ細君を残して送られて行くのである。そこはカトリック修道院の経営で、誰でも来る者は拒まずの精神から、曰くのある人も受け容れてくれたからだ。

その頃光男は姉シゲ子の居る神戸に再び帰っていたが、丁度その頃、朝鮮動乱が激しくなり、米軍が国内から出て行き、それを補うために「警察予備隊」が創設された。光男はそれに志願し合格して軍事訓練を受けつつ、警察予備隊が「保安隊」と変わり、「自衛隊」と変革を遂げてゆくなかで、光男はその草分け的な経歴が買われたのか、「航空自衛隊」に転属され、士官候補生の花形パイロットになっていて、任地も青森県の三沢基地に転属されて来たのだから、人間の運命なんて誰も予測出来ないものである。

その頃は光男に熱いラブレター攻勢を仕掛けた見習い看護生たちも、一人前の立派な看護婦になっていた。

ある日の午後、見通しの利く広場に一塊（ひとかたまり）の白衣の群れが並んで空を眺めていた。何事かと近づいてみると、西の方の空から飛行機のエンジン音を響かせて、一機の練習機が現れ、松丘の

上空を一周してコの字を描いて旋回したかと思うと、市街地の空へ見えなくなった。

日本海の訓練空域での訓練飛行を終わり、帰路に就く木曜日の午後の一瞬だけ、白衣の娘たちへのサプライズをしていたのだった。それは言わずと知れた光男の搭乗する、当時赤トンボと言われた訓練機で、看護婦たちは一斉に喚声を挙げて去りゆく機影が見えなくなるまで手を振っていた。

後で段々と解ったことであるが、光男は遠く離れていても、見習い生の深浦から来たC子とは音信を絶やすことなく続き、ついに二人は結婚の約束まで出来ていて、くだんのサプライズもC子への愛のサービスだったと言うのだから、光男もなかなか粋なことをする奴だ。

あの愚かな事をしでかした放火犯人の兄一男についても一筆書き加えて置かねばなるまい。復生病院で彼はカトリックの信仰に目覚め、洗礼を受けて一年後には細君の待つ松丘に戻り、皆のために「公教要理」の勉強を指導したり、情熱家の彼は自治会の運営にも参画して、一時は自治会の会長を勤めるまでになったが、惜しくもガンで亡くなってしまった。弟の光男は自衛隊で昇進を続け、定年で除隊する時の階級は「一尉」になっていて、千葉県にある飛行機の部品を造る会社の重役に迎えられていた。あのラブレター事件の一人、深浦のC子は今や一流会社の重役夫人に納まっている事を喜びとしたい。

松丘保養園全景（昭和16年頃）

日本国内療養所医療従事者
フィリピン ハンセン病研修に参加して（前編）

看護師　横内里美

今回、日本国内ハンセン病療養所十三施設の医療従事者（医師または看護師）を対象に、新規発症者を見る機会が皆無であるため、公益財団法人：笹川記念保健協力財団（以下笹川財団）の発案・指揮のもと、フィリピン国内でのハンセン病に関する歴史・現状把握を目的とした研修に参加しました。

日程は、平成二十七年二月十五日から二月二十一日の一週間で、フィリピン国内のセブ島・クリオン島・マニラ市を巡る研修旅行でした。

研修前には、渡航準備やそれに関わる書類提出などが、約一ヵ月の間に組み込まれていて、この研修が今回初の試みであった為か、笹川財団と厚生労働省間でのやり取りが難航し、その為当人への連絡はいつもギリギリなわりに、提出書類は直ちに提出しなければならず、慌ただしい準備期間となりました。

前日に成田空港近くのビジネスホテルに滞在し、いよいよ初日成田空港での集合場所で、この研修の指揮である笹川財団の喜多悦子理事長やマネージメント担当の三賀さんと出会い、出国の書類を渡されました。搭乗手続きを終え、出国までの間この研修に参加する他の研修者たちと会議室で会い、顔合わせと自己紹介・挨拶を行いました。いよいよ出国、こんな海外研修に行かなければ一生見ることの無かった緑色の公用旅券を携え、飛行機に搭乗しました。

ここで今回の研修の発案である笹川財団についてお話しいたします。正式名称を公益財団法人・笹川記念保健協力財団といい、財団の活動は①ハンセン病対策②ホスピス緩和ケア推進③公衆衛生向上で、ハンセン病とこの病気に由来するさまざまな問題を世界からな

くす取り組みを行っています。この研修もその取り組みの一環で、理事長である喜多悦子先生自らの引率で行われました。

フィリピンは正式名称を「フィリピン共和国」といい、大小七千百七の島々からなる島国です。日本から南西に約三千㎞、飛行機所要時間五時間十分です。公用語は現地語であるフィリピン語と英語、首都はマニラ市で日本との時差は一時間。日本で正午十二時だとするとフィリピンではまだ午前十一時となります。通貨はフィリピンペソ（ＰＨＰ）で百円がおよそ三十三フィリピンペソにあたります。コンビニで売られている水が四十フィリピンペソでしたので、約百三十円と考えますと物価はほぼ同じもしくは少し高い印象でした。人口は西暦２０１４年で一億を超え、毎年増加傾向にあります。

笹川財団喜多悦子理事長

フィリピン入国の地はセブ島です。世界有数のリゾート地と知られているセブ島ですが、今回の研修ではリゾートとは皆無のセブ島を見学しました。入国は夜であり、翌日の訪問先であるエバースレイー療養所の所長さん同席で食事会がありました。

本格的に研修の始まり、二日目です。

① セブ・スキンクリニック訪問

正式名称をレオナルド・ウッド記念　セブ・スキンクリニックといい、ハンセン病根絶に尽力を尽くしたアメリカの軍人兼医師であるレオナルド・ウッド総督の名を冠しています。ハンセン病疫学に関する現地調査・管理を行うために、当時最も罹患率が高かったセブ島が拠点として選ばれ、疫学・臨床部として当クリニックが開設されました。当クリニックでは一般的皮膚科疾患治療を無償で行い、一％の新患者が発見されてきました。毎年千人以上の登録患者の治療と、訓練センターとしての役割を持ち、

セブ・スキンクリニック

国内外、毎年約二百人の医師が訓練を受けるために訪れています。また診療時間外で、患者カウンセリングや郊外へ赴きハンセン病患者を探すアウトリーチ活動を行っています。研究部では新たな抗ハンセン病薬やワクチンの研究、ハンセン病分子研究・免疫マーカーによる診断等の研究がされています。

当クリニックを受診されているハンセン病罹患患者十三名、推定年齢十代未満～六十代）の協力のもと、TT型～BT型～BB型～BL型～LL型までの臨床症状、Ⅰ型およびⅡ型らい反応、スメア検査、スメア検体の顕微鏡検査を行いました。ハンセン病発症時の急性期的症状を見たことがない日本のハンセン病医療従事者にとって、大変意義深く貴重な体験でした。罹患患者は治療開始後二週間には菌が減り、治療をしながら学校・仕事も継続しています。セブ島ではハンセン病が地域に周知されており、社会に溶け込み、偏見や差別はあまり感じられませんでした。知覚検査はモノフィラメントで知覚を探る方法で日本と同じでした。スメア検査は治療薬開始前後に行われており、同一部位6ヶ所を採取していました。採取方法も丁寧に教えていただき、普段訓練センターとして国内外の医療指導者に行っている訓練の片鱗を感じました。スメア検体の顕微鏡検査見学では5＋の検体を直に見させていただきました。

② エバースレイー・チャイルズ療養所

エバースレイー・チャイルズ療養所はウッド総督の友人であるエバースレイー・チャイルズ氏の提案で、ハンセン病罹患者の治療・介護・リハビリテーションを目的に建設されたフィリピン国内八ヶ所のハンセン病療養所の一つです。現在は総合病院として、救急部・手術室・薬局・臨床検査部・理学療法科があり、歴史・史料博物館が併設されています。偏見に対する啓発活動を行っているほか、患者カウンセリング・退所する患者家族への教育などを行い、社会的役割を担っていました。広大な敷地内には南国特有の植物がたくさんあり、ゆったりとした雰囲気でした。皮膚科外来、一般診療患者用の有料病棟、ＶＩＰルーム、救急部棟、リハビリテーション棟兼ハンセン病患者病棟を見学しました。建築業・配管業・電気関連業・介護業務等の職業訓練サービス、縫製・仕立てなどの訓練指導による生活援助、それぞれの

希望に沿った教育プログラムが開始されており、その内容はエレクトロニクス・コンピューター・自動車関連等多岐に渡るそうです。

療養所内地面は石畳み・砂利道・草地などで、所々坂道になっていました。見学途中義足の入所者に出会い、歩行移動が大変そうな印象でした。療養所には垣根がなく、通用門らしき通りを抜け敷地外に出るとすぐに学校があり、子供と親たちが集まっており、歌で歓迎してくれました。お礼に「幸せなら手をたたこう」を参加者で歌ったところ、手を叩いたり、足を鳴らしてくれました。子豚の丸焼きと歌で歓待してくれ、最後に修了証書とお土産を頂きました。

研修三日目はセブ島からの移動便が遅延した影響で、移動のみでした。

研修四日目はクリオン島の見学です。

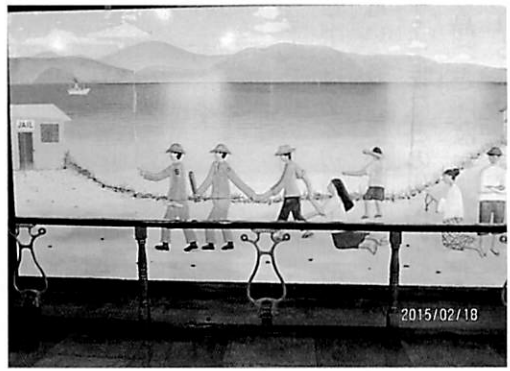
③ クリオン療養所

クリオン島はハンセン病隔離の目的で選ばれた島です。辺境で患者が逃亡しにくく、かつ食べ物が自給でき特に水の供給が豊富というのが、この島が療養所に選ばれた一番の理由とのことでした。エバースレイー・チャイルズ療養所と同じく、フィリピン国内八ヶ所の療養所の一つであり政府方針のもと、一般診療化・総合病院化を求められましたが、当初「隔離の島」として選定されただけのことはある辺境地であるため、近隣の島群からの少ない受診・入院患者と患者の二世・三世、職員の二世・三世などの住民が対象のようでした。「生ける死者の島」と呼ばれ、ハンセン病隔離政策の世界的象徴とされるこの島は、ハンセン病を学ぶ上で必ず議題となる場所です。長島愛生園はこの島をモデルに作られたとのことです。

山肌にくっきりと「PHS」の文字（クリオン島）

クリオン島へはコロンという港から約一時間、船に乗っての移動でした。島に近づくにつれ、島の山肌にアメリカ軍の鷲のマークとフィリピン保健省紋章のＰＨＳという文字が白く目立ってきました。これは、この島が危険な島で寄港禁止であるということを知らせるものだったと教えられました。１９０２年に療養所が設置されてから、沢山の患者が送り込まれ、１９３４年には六千五百人を収容する世界最大の療養所になりました。

クリオン資料館は以前大きな台風により破壊された建物を、笹川財団の支援で新しく作り変えたとのことでした。回復者の方々が、おそろいのＴシャツを着て、各部屋で説明をしてくださりました。診断・治療に使った昔の医療器具や、ＭＤＴ（多剤併用療法）に使った薬剤や写真、標本、カルテ類、大風子油による治療に使った物品等がきちんと整理されて置かれていました。資料館の大きな壁に絵が飾られていました。昔の隔離の様子が描かれた絵で、隔離の何たるかをよく物語っていました。島内通貨が展示されており、日本にも園内通貨が存在し、共通の事象でした。つまりは逃亡しにくい政策の一環として国内通貨を持たせない政策だったのだなと実感しました。また「隔離の中の隔離」という言葉を説明していただきました。これは、親である患者とその子供を生まれてすぐ引き離す対策のことです。母親がガラス越しに産んだ自分の子供に面会したという部屋が再現されていました。日本では断種政策が取られ、子を産む自由を奪われた悲しみがありますが、フィリピンにも違った形の悲しみがあることを実感しました。またフィリピンは戦時中多数の国の植民地化になった背景があり、多数の国の通貨、特に日本政府発行の通貨も展示されており、私自身、祖父がフィリピン沖で戦死していることもあり感慨深かっ



クリオン資料館「隔離の絵」

たです。フィリピン入りする際、フィリピン沖を渡るときに、飛行機内から祖父への鎮魂の祈りを捧げる機会ともなりました。

クリオン療養所所長のクナナン医師はクリオン島で生まれ育ち、この島への恩返しの想いで、ハンセン病の活動をしておられるとのことでした。資料館前に手編みレースやアクセサリーを見せてくれた女性がおり、ハンセン病回復者で手芸品を生業にしているとのことでした。最後に修了証書とお土産を頂きました。

クリオン療養所が建設されてから１９０６年から現在で１０９年が経過しています。海岸沿いに百周年記念碑が建てられていました。

向かいには小学校があり、丁度帰宅時間で子供たちと触れ合いました。少し恥ずかしげに、それでも笑顔で手を振り返してくれました。

（後編につづく）

研修参加者

短歌　白樺短歌会

苦笑ひする

滝田　十和男

土百姓の出なれば朝の照り降りの気に掛かるなり老いたる今も
北ぐにはひさしく雨の降らざれば畠の渇き思ひやるなり
ふるさとの村も過疎化に悩みをり二十年後はひとの住まぬと
穏やかに過ぐ山村の行く末もきびしきものよ他人事ならず
懸命に幼稚園児の土掘りて記念の桜植えてくれたり
身の丈に合ふスコップを振りあげて桜苗木を植える園児ら
車椅子押され植樹の傍らに幼稚園児と掛け声交はす
何時の日か苗木の伸びて咲き競ふ桜を仰ぐ夢も抱けり
珍しや庭の樹に来て鶯の鳴き始めたり片音混じりに

週毎に顔見せに来るとて初孫の写真幾枚添へてとどけり

九十なるわれの齢ひを生きている証しに綴る歌はよろこび

列島は西の半分雨ばかり北は日照りのつづくこの夏

久々に高齢者慰安に参加して海沿えを往く眺めまたよし

湯の宿を会場とせる午餐会折詰開けてひまかけて食ふ

知られたるサボテン園も観て回る車椅子の列珍らしがられ

七夕の近づきたれば「百歳まで頑張ります」と札に書き込む

老骨の身に虫の良き希ひかも明るき明日を信じ居るゆえ

笹竹に吊す希ひはそれぞれに老いたる者ら幼なのごとし

彦星と織姫の逢ふ故事まもり老い湯にヨモギ束ね浮かばす

はやばやと土用牛湯に浮かべたるヨモギの草の匂いなつかし

年寄りとは詮なきものよ度忘れのたびたびにして苦笑ひする

保養園での十一年七ヶ月

三浦　喜美子

昭和二十六年二月六日、私は松丘保養園に入園しました。一生忘れる事が出来ない日です。

生活が一変し、闇の中に入って行く様な気持になりましたが、先生の言葉に希望をいだきました。

「顔半分だけだ。治療して帰れるようになる。」

一生懸命に治療して必ず退園すると心に固く誓ったのです。プロミン注射一日二回午前、午後。服用薬プロトゾール一日三回出して頂きました。部屋の方々は、こんなに薬を出してくれるのは、治る見込みがあるからだと言いました。本当に嬉しかったです。どんな悪天候でも治療は休んだ事はありません。治療の鬼とも言われました。

私が入園して二ヶ月たちました。まだまだ涙が乾きません。そんな時に分館に呼ばれました。

人事部長が居て、新患者が県の方二人に連れられて来ておりました。五十代の女性の盲人の方で、私に面倒を見て呉れとの事でした。私達の部屋に入るのでよろしくとの事で、同郷の方でした。県の一人の方が桜の枝を私に呉れました。少しつぼみがふくらんで居ました。嬉しかった。其の日は私の故郷（ふる里）の神社のお祭りの日だったのです。昭和二十六年四月十五日でした。

その方には、先ずトイレ、洗面所を覚えて貰う様に務めました。用があったら何時でも遠慮なく言って呉れと常に言いました。夜は、私の隣に床を敷き、夜中には私が用をたす時、一緒にと声をかけました。誰にでも何時もお礼を言っていました。私はこれが仕事ですから礼の言葉はいらないと言いましたが、礼儀正しい女性でした。私は、目が見える時になぜ入園出来なかったのか、入園の時家族の方が一人も同行しないの

はなぜだったのか、そう考えただけでも涙が出てきました。全く違った世界に来て、不安で一杯だったでしょう。

六月下旬に旦那さん、息子夫婦が面会に来ました。其の時の女性の喜びよう、初めて笑顔を見た様な気がしました。その後、年二回は旦那さんが面会に来ました。洗濯、縫い物は勿論の事、月二、三回程の代筆もしました。ある日、女性に園内にある天理教教会に連れて行ってと頼まれました。家は仏教だがこの病になった時、近所の方に勧められお参りしたそうで、今後もお参り出来たらとの事でした。暗く沈んで居た女性が部屋の方々とも話にとけ込む様になり、私も嬉しかったです。

昭和二十八年頃でした。医務課長の武田先生の奥さんの力添えのお蔭で婦人会が発足致しました。私は不自由者の付き添い看護をしていた為、園内の事は全く無知でしたが、初めての会合に出席しました。すでに婦人会長、副会長、役員が決まって居り、みんな健康で美人で元気、頭も良く、発言する方々で、私はただ驚いて帰ってきました。すると私に書記をと頼まれました。全く自信がなく断ったのですが、二人体制ですから気楽にと言われ引き受ける事にしました。

皆さんの事を覚える事も出来た一年でした。次の年は部長の部下として頼まれました。その方の人柄に私は惚れて居りましたので喜んで受けました。一年一年と進む内、病気が悪化、また都合上役員が出来ない方々が増えて来て、私に部長の依頼があり面白味も出て来たので引き受けることにしました。私が常に心にかけて居る方にも協力して頂きました。

演芸の一つとして三つの唄を始めました。アコーディオンの方にお願いし、三つ共一番だけ唄った方にはカネが鳴り、賞品も出ました。思いのほか沢山の方々に参加して頂き、嬉しい悲鳴を上げたのを覚えております。又卓球大会をと思い、役員会議に計った所、不可決になりました。理由は手足にハンディのある方が一生懸命のあまり、ケガでもしたら大変との事でした。

婦人会も皆様の努力で発展の一途をたどり、生花の展覧会も行なわれました。又婦人会発足五周年記念式典等も行なわれました。私はただ健康面が少し良かっただけでした。無理にお願いされ副会長を引き受け、会長さんの後を歩いて行けば良いと思ったのですが甘かったのです。この年の九月に退園する事になり、申

し訳ない気持が一杯で保養園を後にすることになりました。

少しずつ快方に向かい、退園するにも手職とまではいきませんが、ミシンを使う事が出来たらと思い、三年二ヶ月の看護に別れを告げ縫工部に入れて頂きました。同時に不自由舎を出て女子寮に移りました。そこは仮の住で改造している寮が出来次第移る事になっていました。今迄、年配の方々と接して来た私は、全く違った生活に慣れるのに時間がかかり、休日には自然と元の部屋の方向に足が向いていました。

半年程で別の寮に移り、同じ年頃の方々三人顔を合せ、新生活が始まりました。

間もなく私より四才位若い、きれいな新患者さんが入って来ました。話によるとお父さんがここで亡くなり、面会に度々来ていたので病気も早く気付いたとの事でした。治療して必ず帰ると一生懸命でした。この点で私と考えが一緒でした。その方には、実家に私も連れて行って頂き、大変御馳走になり一晩泊まって共に帰りました。母一人、娘一人で退園する日を楽しみにして居る様でした。快復も早く退園して結婚しました。「婿様」を貰ったとの事でした。その後私も退園し、文通して居りましたが、ある日手紙が住所不明の為戻って来ました。心配でしたがどうする事も出来ませんでした。

縫工部に入ってからは、覚える為毎日必死の日々でした。入って一年位経って、ドレスメーカーの洋裁の先生に教師として来て頂ける事になりました。夢の様でした。週一回午後三時間程で、縫工部員ばかりでなく希望すれば誰でも参加出来ました。その頃編物の先生にも来て頂いており、そちらの方を習う人が多く、最後には洋裁の方は縫工部の方々だけになりました。

先生には、二年間来て頂きました。その後は皆さんと協力し勉強し、退園する時は自分で作ったスーツを着用しました。

今の天皇陛下と美智子様の結婚式の様子、その後のパレードを見るために、一台のテレビの前は人、人、人の山でした。気品溢れる美智子様の美しい事、その後に続く車の行列でした。夢心地の様で見て居りました。忘れもしない昭和三十四年四月十日の事でした。

青森にも桜の花が咲きました。いつもの通り出勤した縫工部でしたが、あの素晴らしいパレードの様子が

みんな頭から離れません。タクシーで合浦公園に花見に行く事になりました。園内からは出発する事は出来ませんので、三内墓地まで「隠れる」様に行き、売店前よりタクシー三台に乗り込みました。花はどうでもよくタクシーを連ねて走る、その風景を楽しみ喜びをかみしめたかったのです。たかが三台でも当時の私達は一大行事でした。此の時は病を忘れ、貴婦人になった気分で笑顔一杯でした。合浦公園に行き、その後は近くの映画館入りました。

帰りはまた、三台の車で帰ってきました。誰にも気付かれないと思いきや、上司の方より大目玉を喰らいました。縫工部を無断で休んだのは悪かったのですが、日給なので問題ないと思っていました。それに個人のお金で行ったのだから、と思いましたが考えが甘かったようです。当時、外出する時は許可を受けるのですが無断で行くしかなかったのです。縫工部全員がクビになると思っていましたが、それは免れました。

運動会も行なわれました。主にグランドでした。

ある年は公園で行なわれました。その時私は五十米の競技に参加しました。ゴールが目の前に迫って来て、二人はすでにゴールをしていました。私が三等と思いきや、後ろよりスーっと走って来た人が居り三等を取られてしまいました。私が目前で力を緩めた為でした。残念で悔しさ一杯でした。

又グランドでの運動会では、借り物競走で、子供を連れて来いと書いてあり、すぐ近くに子供が居たので「私と走って」と言って無理に手を引いて走りました。泣きもせず、男の子がよく走ったお蔭で一等となりました。その男の子は退園したと風の便りで聞きました。今や国内のどこかで元気で居る事でしょう。

入園以来四回目の引越しで落ち着きました。

この寮は改造して出来たばかりでした。一室に四人で一号、三号、四号は女子の部屋で、二号は夫婦部屋でした。南の方が玄関とすると北の方にも廊下でトイレ、物置き、それに流し場となって居り四号と共同でした。広めに出来て居り、二号、三号の間は廊下になっていて、便利に出来て居りました。一号室には大正十五年生まれ、三号室には昭和二年生まれ、四号室には昭和四年生まれの外は、皆若く元気一杯で何時も賑やかでした。一号室は勉強好きの方々、三号室は普通の方々、四号室は美人揃いの方々でした。各職場も違い、時間に追われての一日でした。夕食は楽しく

ゆっくりと話に花が咲き時には隣の部屋の方も来て共に過ごした事もありました。

ある日売店の親方（山内さん）が縫工部に来て八甲田山に登る事になったので希望者があったら連絡して、と帰りました。私は嬉しくて早速申し込みました。

当日は早朝出発しました。何台かは忘れましたがジープに乗りました。顔を見られないように覆いをかけられたので、折角の景色を楽しむことが出来ませんでした。

各職場にも声を掛けた様で、町の中を走る時は静かでしたが野原など走る時の賑やかな事。デコボコ道にもかかわらず誰一人として乗物に酔う事もなく、皆助け合って頂上に着きました。

頂上で休んで居た所一人の青年が自転車で「今来た」と言ったのが耳に入ってきました。あちこちで驚きの声があがりました。後でわかった事ですが、誘いが無かった故、置き去りにされたとの一念で後を追って来た様です。意地や悔しさでは出来るものではないです。それに＋（プラス）体力、気力、脳力がある方だからこそ実行出来た事でしょう。帰りも自転車で帰って行きました。県内の方でもないのによくぞ道順を迷わず

八甲田山大岳山頂にて（昭和35年頃）

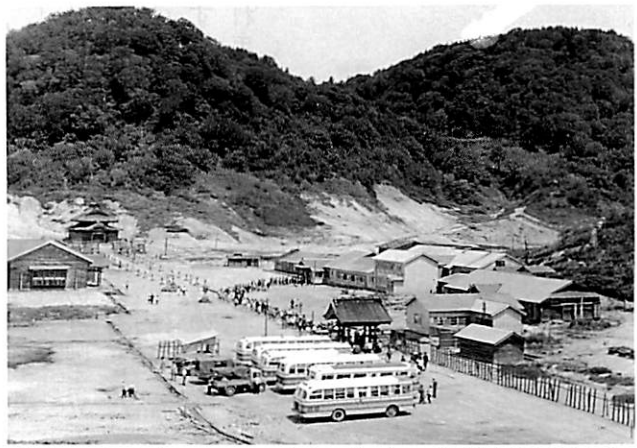
頂上まで来たと、私は感心しました。
しっかりした青年だった故、退園も出来た事でしょう。
天気に恵まれ苦労も忘れ喜び合いました。ゆっくり頂上の空気を吸い、下山しました。

次は恐山に誘われました。恐山という名前は聞いていましたが一度も行った事はなかったので喜んで参加させて頂きました。八甲田山よりは人数は少なかったと記憶しています。参道を通りお寺に入りました。宗教の違う方はお寺には入りませんでした。当日は参拝者が少ない事もあり、お坊さんが案内してくださり、仏像の裏の方迄も見せて頂きました。続いて外の方も案内して頂きました。私は熱心に聞いて所々に塞銭を上げて拝みました。内、外を案内して頂いたお坊さんには感謝の気持で一杯でした。

再入園して、そのお坊さん、山内さんは健在と聞いて、当時のお礼に行きました。私の事は忘れて居ると思いきや覚えていて呉れて、大変喜んでくれました。嬉しかったです。

その後恐山に行きましたが、初めて行った時のような感動はなかったです。当時のような時代に車を手配して呉れ御苦労があった事でしょう。改めて感謝の念で一杯です。

保養園でのレクリエーションの始まりは、夢の様でした。私とB子は弁当作りの手助けを頼まれました。早朝四時に炊事場でおにぎりを作りました。炊事の方


恐山へのレクリエーションはジープ２台で（左側）（昭和35年頃）

は海苔巻きを作っていました。これをセットにしてレクリエーションに参加した方々に昼食として配りました。何回かにわけての運行でした。私が初めて参加した場所は深浦方面の千畳敷でした。バスに乗っても喜び一杯でした。バドミントンで遊んだ事が懐かしく思い出されます。種差海岸、其の外にも連れていって頂きました。

B子さんは、私より半年早く退園し、上京し結婚しました。その後私も上京しましたが、なかなか連絡が出来ませんでしたが、二年後に再会出来、あの時の感激は忘れられません。お互いの家にも行き楽しかったです。その後、風邪を引いたと聞いていたのですが、突然胃の手術と聞き病院に行きましたが終わった後でした。御主人が言うには胃ガンで、外にも転移して居り、すぐ手術が終わったとの事。驚きでした。気の毒で言葉もありませんでした。

危篤の報を受けて行った時は、虫の息でした。昭和三十七年四月八日退園し、昭和四十二年四月八日亡くなりました。こんな偶然ってあるのか不思議でたまりません。退園して丸五年でした。ご主人は全生園を退園し、会社勤めでした。B子さんはある学校の用務員として働いておりました。生活が安定しており将来の計画を立てていたのです。

退職後は広い土地に家を建て、花を植え、野菜を作り、時には旅行にも行きたいと嬉しそうに話をして居りました。どんなにか悔しかった事でしょう。退園後は友達も出来ましたが、心から話す事が出来ないとの事。それは私も同じ悩みでした。会うと時間の経つのも忘れて話し、又会う事を約束して別れました。其の友を亡くし力が抜けてしまいました。

私たちはB子さんの様に将来の計画を立てる事が出来ませんでした。収入が不安定の為でした。それでも一生懸命の日々でした。貧しい中にも、若さと共に明るく過ごす事が出来た、其の当時の事が今は懐かしく思い出されます。

野の花の微笑(ほほえ)み

比良信治

(13) 青森の復帰者を迎え入れて

六月の朝はさわやかであった。地獄坂を降りて教会の前に行くと、家族連れや夫婦などの方々が続々と教会に入って行く。文太郎は十時十分前に開いたドアの内部に入った。受付で神父に言われた主意を述べると、近くにみえた戸田神父に伝えた。神父は文太郎に近づいてきて、聖堂に案内して一番後ろの角の席に案内した。黒い詰め襟の服を着た体のがっしりしたタイプで六〇歳位に見えた。

広い聖堂の中は、木製の長椅子が中心の通路を挟んで横に並び、ほぼ座席が埋まる位に座っていた。正面に木製の十字架が飾られていた。右側にオルガンがあり、左側の壁際に神父が座っていた。まもなく前列の右手の方から司会者の声が聞こえ、「初めに〇〇番の聖歌」と告げられると、全員が立ち上がって朱色の聖歌集を手に持って、オルガンに合わせて歌い始めた。こうして日曜のミサ聖祭が始まった。約一五〇人位だろうか、やがて聖書の中の第一朗読が読まれ、第二朗読が終わると、神父の朗読のあと、神父の説教が始まった。

神父の話は難しいものと思っていたら、醜い火傷をした顔を持つ母と娘の話であったので、文太郎も耳をそばだてて聞いた。その少女は成長するにつれて、母と一緒に教会に行くのをさけるようになった。今までは母は顔を包帯で覆い醜さを隠していた。その母の顔の皮膚は焼けただれた跡で醜いものだった。娘の友人からも母の醜さ、恐ろしさが広がり、嫌われて、友人との交際も難しくなっていた。

ある日、母は醜くなった訳を初めて娘に語った。

娘が生まれて間もない頃に、町内に大火事が発生して忽ちわが家にも燃え広がり、赤子を毛布にくるんで脱出したが、火の手が猛烈で、母は炎の中をか

いくぐって脱出したが、その時母の髪の毛も顔も焼けただれたが、母の命だった赤子は助かったと言う。
この話を聞いて、娘は泣いて母に謝った。今日少女が生きているのは母のおかげである。母のやけどと娘の命が引き替えになったのだ、と思うと、母のただれた顔が消えて、美しい顔に見え、やさしいマリア様になって娘を見つめているようだった。

ふと文太郎は、青森に住む母のことを思った。母は顔のうち両まぶたが赤くにじんで見えるが、見苦しいものではなかったが、わが子の成長を祈って心を痛めたであろうと、改めて両手を合わせてお祈りし、感謝した。
その日のミサの聖祭のあと、神父に名前と住所と勤め先をノートに書き、勤め人のために、普段は夜か、日曜しか教会に来られないと話した。
日中の勉強会は出来ないが、金曜の夜ミサのあとの聖書の勉強会に出るように一応約束した。
聖書を旧約から読んでいき、質問などをノートにメモして金曜の勉強会に持ってくるように話しあった。

分厚い聖書を青森の恵子は本当に読んだのであろうか、と思った。その夜に恵子に電話を入れて教会に行ってきたことを報告すると、彼女は驚くとともに、とても喜んでくれた。聖書のことを聞くと、彼女も一人では中々読み続かないので、函館にいた時は教会の聖書を読む会に入って勉強したことを教えてくれた。あとは日曜のミサに出てくる聖書のことばに照らし合わせて読んでみて、出来ればその前後も読んでみて、少しでも聖書に親しむように努力することを、恵子は教えてくれた。それにしても、文太郎が真面目に教会に取り組んでくれるので、恵子は嬉しかった。早く一緒に教会に通うようになりたいと思った。
文太郎にとっては、日曜日はのんびり過ごせなくなり、洗濯は午後か夜にやるように組み替えねばならないと思った。

やがて七月の終わりになると、学校はすべて夏休みに入る。恵子も保育の本を持って、文太郎の家にやって来た。そして教会の神父にも婚約者として恵子を紹介した。神父は二人を前にして、もしも結

婚を急ぐのであれば、十二月のクリスマスの洗礼組に入れてもいいし、来年でよければ復活祭の洗礼に入ってはどうか、と予定を考えてお話して下さった。

二人の間では結婚式も決まっていなかった。しいて言えば、恵子の短大の卒業後の方が良かった。とすると、二年後になる。二人とも急ぐことはないと考えていた。ただ、文太郎の母が元気なうちに結婚した姿を見せたかった。そこが一番大事なところであった。

八月の初めに、松丘の園長名で文太郎に手紙が届いた。十月中旬に、青森市内のホテルで、日本ハンセン病医学会が三日間行われるが、二日目の事例発表の中で、「ある回復障害者の社会復帰について」と題して、佐久間文太郎が約二十分間、小樽での受け入れについて対処した方法と現況報告をすることになった。まず事例報告を提出することであった。ようやく書き上げて送付した後に、松丘に住む文太郎の母に電話して青森に出掛けることを知らせた。すると、母は園長の診察のときに、その息子のことを聞いたので、とても嬉しかったし、久し振りに会えるので待ち遠しいと、弾んだ声を出していた。

同室の皆さんの希望品を聞いて、その時に持って行くことを約束した。母は同室の方々より注文を聞き取り、九月の初めには、文太郎に知らせた。簡単に入手できない品物は、施設の栄養士や関係者にも聞いて取り寄せるものもあった。

文太郎の青森行きの日がやって来た。施設長の許可を得て、今回は特別に五日間の休暇をいただいた。彼は母と同室の四人の希望の品物などのトランクが重かった。学会の発表は書類袋一つである。いかに要領よく報告するかにかかっている。そこは多少経験があるが、初めての学会には不安があった。

久し振りに津軽海峡を連絡船で渡った。空も晴れて波もおとなしい海峡で、過ごしやすかった。

青森に着くと学会に出る前に、大事なトランクを療養所に運んで置こうと思った。タクシーで療養所の福祉課に行き、主任に訳を話し三日目の朝まで預かってもらうように頼み、母に顔を出さずに、そのまま医学会の会場のホテルに引き返した。

受付などは、地元療養所の職員が中心になってい

たので、発表者の部屋に案内された。そこには、園長や看護婦長や事務長など療養所のお歴々が揃っていた。明日の発表者の集合と打ち合わせがあるので、その部屋に入ると、園長が弘前大学のある教授を紹介した。

「この小樽の先生は素晴らしいボランティア推進論者よ」と、文太郎を紹介した。その年輩の教授は、園長より文太郎のことを聞いていたようで、

「やあ、早坂と言います。あなたのこと、園長より聞いておりました。明日は楽しみにしています。ところで、あなたはまだ独身と聞いておりましたが、それはともかくとして、『福祉施設論』と『地域ボランティア論』を大学で講義してみる気はありませんか？頭の中に入れておいて下さいね・・」

にこっと微笑んで、その教授は立ち去った。園長が横にいて、

「大学では『福祉』の授業を始めたいので、いい先生を探しているんですよ。あなたを推薦したいがどうですか？」

「先生、それはとんでもございません。わたしなど若い人に教える器じゃございません。とんでもございません。ご推薦は感謝申し上げますが・・」

「いい話ですから、考えておいてくださいまし」

園長先生も立ち去った。が、急にこういう話が持ち上がるなんて、学会って面白いところだと、文太郎は内心思った。各地、各方面から先生方が集まるところなので、交流の場を通して、大学や病院との交流が起こるのは当然かもしれなかった。しかし、文太郎にとっては、育成園という老人ホームがあるだけに、簡単に移動はできないと思った。むしろ、今の園長が退職したら、文太郎には若すぎるから早いが、次の次くらいには園長の席が待っているような気もするので、よその場に移ることは無理だと考えた。

学会の第二日目の午前の部で、文太郎は二番目に登場して、「ある回復障害者の社会復帰について」をテーマに、小樽でいかにして受け入れて来たかの苦心話を発表した。

文太郎は当時のことを思い起こして語りはじめた。

「私は、私の母を通じて園長先生を存じあげていた。小樽に帰る方は存じておりませんでしたが、退所するということと、何か支援して下さい、という園長

先生のお言葉から、私は千歳空港に甥子さんと到着されるときに、このおじいさんを迎えに行きました。空港と車の中で話し会って、おじいさんの人柄や考え方の一部を知ることができました。私は、この最初の出会いを大切にしたいと思っています。何れにせよ最初の出会いを大切にして、ここから始まるのです。ですから老人ホームでも同じです。相手の方のことを出来るだけ知っておいて、大切にもてなすように受け入れることが基本だと思っています。」

そこで場内から拍手が起きた。文太郎は復帰者の方と話し合い、この方が何でも人に頼るタイプではなくて、自分でやれることは自分でやるタイプであることがわかり、お手伝いのボランティアのことを話すると、相手にも迷惑を掛けないように、行きたい所に案内し、教えてもらい、自分で出来ないところを助けてもらう考え方で大体一致した。その上に立って、午前と午後の約二時間を基本に、ボランティアの方を募集し、調整しあって、大体七日間、十四人の訪問ボランティアを二週間位かかって出来上がった。その上で月火水木と金土日の二グループに別れて、一ヶ月に一回顔合わせ打ち合わせ会をやって話しあった。失敗したり、トラブルや嬉しいことも話しあった。全体をまとめる世話役も決めた。こうして、月、金のまとめ役との話し合いも持つようになって、次第にボランティアの手も借りなくて済むように、本人も上手に生き方を覚えてきたと言う。車椅子で店番をやってみたいというので、スーパーでのレジ係をやってみたが、成功とはいかなくとも、店主が良い人なので助かっているという。

文太郎の報告は終わった。拍手が大きかった。

園長先生は、わが事のように喜び、文太郎に感謝の拍手を送った。

その夜の懇親会で、文太郎も大役を果たして大いに飲んで休んだ。

翌朝ベッドのそばの電話で起こされた。声を聞いて恵子だとわかった。文太郎はカーテンを開け、トイレに入って出て来ると彼女のノックが聞こえてきた。ドアを開けると、白いスーツ姿のチャーミングな恵子が立っていた。

「おはよう！」

と言って、文太郎は恵子の頬と唇にキスをした。

（つづく）

松丘保養園慰安会　賛助会員募集

一般財団法人松丘保養園慰安会は、ハンセン病問題の啓発活動を行い、偏見差別のない社会の実現に寄与することを目的としております。

そのため、多くの団体、個人の皆様からの深いご理解と財政面でのご支援をいただくことが不可欠です。

募集の対象　趣旨に賛同して下さり、松丘保養園を見守ってくださる方（入園者、職員、退職職員、一般の方など、どなたでも構いません）

年会費　個人会員　一口　一、〇〇〇円
法人会員　一口　五、〇〇〇円

申込方法　入会申込書を松丘保養園福祉室で配布しておりますので、お問い合わせください。

一般財団法人　松丘保養園慰安会
（国立療養所松丘保養園福祉室内　高山　忠久）
〒〇三八―〇〇〇三　青森市石江字平山一九番地
電話〇一七―七八八―〇一四五（内線二〇〇番）

人事異動

【採　用】（5月1日付）
看護助手　中村　義彦（賃金職員より）

【退　職】（5月31日付）
看護師　高橋美喜子

【採　用】
《期間業務職員》
看護助手　小村（こむら）　里美（さとみ）
看護助手　猪股（いのまた）　真紀（まき）
（以上6月1日付）
看護助手　小笠原（おがさわら）留美子（るみこ）
（以上7月15日付）

【退　職】（7月31日付）
作業手　富谷　敏男
看護助手　小村　里美
保育士　相馬　貴子

【採　用】
作業手　山本（やまもと）　毅（つよし）
（8月1日付）
看護師　伊藤（いとう）　百恵（ももえ）
（8月17日付）

自治会日誌　○印　自治会

五月中

8日○第16回執行委員会
〃　○将来構想検討委員会に石川会長出席
12日○甲田の裾編集局企画運営会議
14日○保健科運営委員会
15日　歌っこ広場
〃　○地区連絡係定例集会
〃　○看護の日記念講演「笑いはステキな贈り物」
　講師・伊藤一輔函館病院名誉院長
20日○真宗大谷派奥羽教区との交流会で石川会長が講演
21日○厚労省への支部単独陳情の為、石川会長出張
　（～22日帰園）
28日○第31回（平成27年度）歌謡交流大会
29日○第17回執行委員会

六月中

1日　1センターとの話合い
〃　○第18回春季親善交流ゲートボール大会
〃　○6／1付採用職員2名　挨拶に来訪
〃　○曹洞宗　寺田氏来訪
2日　第88回日本ハンセン病学会総会・学術大会（高松）
〃　中央センター2階との話合い
2日○第18回執行委員会
3日　中央センター1階との話合い
4日　2センターとの話合い
〃　○県知事選挙不在者投票日
7日○県知事選挙投票日
9日○慰安会評議委員会に正・副会長出席
10日○平成28年度予算要求統一行動の為、石川会長出張
　（～13日帰園）
〃　○6／8付採用職員1名　挨拶に来訪
11日　国立ハンセン病療養所施設長連絡会議（東京）
12日　全国国立病院看護部長協議会等支部合同会議（仙台）
〃　歌っこ広場
〃　○男　九十二歳逝去　青森県出身
15日○地区連絡係定例集会
16日○倫理委員会に石川会長出席
19日○NHK青森放送局　大川記者、外1名来訪
20日○ロータリークラブボランティア・入所者・職員が桜の植樹と草取りを行い、終了後石川会長が講話した
21日○「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」式典と「ハンセン病問題対策協議会」に出席の為、石川会長出張（～23日帰園）
22日　青森県庁ハンセン病パネル展（～26日）
〃　○函館ひとみ会　菊池氏、外1名来訪

24日○平成27年度高齢者慰安バスレク（平内町「よごしやま温泉」）
25日○消防訓練
26日○「松丘保養園慰安会」について入所者へ説明会
29日○五所川原市立高等看護学院48回生23名施設見学の為来園、石川会長が講演
30日○男　七十二歳逝去　秋田県出身

七月中

2日○将来構想検討委員会に石川会長出席
3日○第19回執行委員会
7日○不自由者棟入居者慰安（七夕祭）
9日○保健科運営委員会
10日　全国国立病院院長協議会北海道東北支部総会（札幌市）
11日　荒川巌元園長の資料引渡式・叙位伝達（旭川市）
14日　岩手県慰問
〃　○地区連絡係定例集会
15日　秋田県慰問
〃　○7／15付採用職員1名　挨拶に来訪
〃　○厚労省医政局国立ハンセン病療養所管理室　松本室長、下田経理係員が来園　石川会長が面談した
21日○倫理委員会に石川会長出席
24日　歌っこ広場
〃　○第20回執行委員会
24日○横手市山内民生児童委員協議会12名来園、石川会長が講演
29日　職場環境整備
〃　○女　百歳逝去　北海道出身
〃　○松丘保養園慰安会評議員会に佐藤副会長出席
30日○第33回（平成27年度）納涼祭

編集後記

子ども達の歓声が響き渡り、多いに盛り上がった納涼祭りの賑わいも去り、今は朝夕、一段と寒く感じる季節になった。

今年の納涼祭りは、初の試み、職員による出店が大好評で、汗だくになりながら奮闘していた。子ども達のためのゲームコーナーも人気の的となった。また、大人の踊りをおぼつかない足元で一生懸命真似ている幼女、初めての線香花火に目をキラキラ輝かせていた子供の表情。それを見ている入所者の顔も生き生きとしていた。

生後間もない赤ん坊を入所者に紹介しながら、抱っこさせている光景はかつての納涼祭り、いや保養園では考えられないことである。

子供達の屈託のない笑顔には、どんな大人も敵わない。この日ばかりは、入所者にとって大満足な日となった。

（佐藤　勝）

園内の出来事

ロータリークラブ　ボランティア来園　6月20日

ロータリークラブ会員と近隣住民約50名が来園し、入園者・職員と共に桜の植樹と草刈りに汗を流しました。

青森県庁にてパネル展　6月22日～26日

今年は園内緑化運動・慰安会についてのパネルも展示。期間中職員が常駐して、保養園の歴史や「松丘みどりの森プロジェクト」について説明しました。

青森県より　ねぶた祭ご招待　8月6日

三村知事へ３選のお祝いを述べたいと、福西征子名誉園長も来青され、入園者とも喜びの再会を果たしました。

昭和五年十二月十日創刊
平成二十七年十月発行　第八十六巻　第三号　通巻六八六号

松丘保養園

国立療養所松丘保養園要覧

松丘保養園は国立のハンセン病専門の療養所で、創立してから今年で106年の歴史があり、ハンセン病患者の医療と福祉を事業としております。

所在地　青森市大字石江字平山十九
園長　川西健登
保有敷地　二三〇、五四八平方米（六九、八六三坪）
建て面積　三〇、三五八平方米（九、一九九坪）
延べ面積　三六、〇三六平方米（一〇、九二〇坪）

交通案内

□電車の便
1．東北新幹線・新青森駅下車（車で約3分）
2．奥羽本線津軽新城駅下車（車で約5分）

□バスの便
1．青森市営バス西部営業所行
2．弘南バス浪岡・五所川原・黒石行き　共に松丘保養園前下車

□航空機の便
青森空港より（車で約30分）

□高速自動車道の便
青森ICより（車で約5分）

□なお保養園に隣接して桜の名所三内霊園（1㎞）と国の特別史蹟指定の三内丸山縄文遺跡や県立美術館（2㎞）等があります。

発行所　一般財団法人　松丘保養園慰安会
所在地　〒〇三八―〇〇〇三
青森市大字石江字平山十九番地
電話　(017)(788)〇一四五・〇一四六
発行人　川西健登
編集人　甲田の裾編集委員会
印刷所　青森市本町二丁目十一―十六
青森オフセット印刷株式会社
電話　(017)(775)一四三一番